

聾学校におけるキャリア教育に関する研究

北市 ゆか

I 問題

聴覚障害者の活躍している職業分野は多岐に渡るが、その一方で聾学校高等部卒業生の就職先は今でも製造業が多く、3年未満の離職率が高いという現状もある(聴覚・言語障害教育研究部聾教育研究室, 2001)。聴覚障害者は、聴者とのコミュニケーションの困難さ、人間関係づくりの難しさがあり、他の障害種に比べて職場適応が困難であると言われている(野澤, 1991)。その中で、聾学校の進路指導も「手に職を」から「望ましい職業観・勤労観の育成」に変化してきている(高橋・四日市, 2001)。また、近年、聾学校においてもキャリア教育に注目が集まってきており、実際に取り組んでいる聾学校もある。キャリア教育は「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」と定義されており、小学校から発達段階に応じて行うという点で新しい教育といえる(文部科学省, 2004)。キャリア教育は他者とのコミュニケーション方法や主体的に自己決定する能力についても養うもので、聾学校の生徒が社会生活に移行するためには特に必要なことであると考えられる。

II 目的

本研究では、聾学校でのキャリア教育の取り組みの現状を明らかにし、聾学校でのキャリア教育についての基礎的情報を得ることを目的とする。また、その中で聾学校におけるキャリア教育の有効性と課題を検討する。

III 予備調査

1. 予備調査1

全国の聾学校でのキャリア教育の実施状況について調べることを目的とし、及び調査Iの対象校を抽出することを目的とし、郵送法による質問紙調査を実施した。対象は、幼稚部以外の聾学校を除く全国の聾学校104校とし、それぞれの学校で適任の教員に回答してもらった。調査期間は、平成20年1

月下旬～2月上旬とした。

78校の聾学校から回答があり、回収率は75.0%であった。調査結果から、約9割の聾学校において何らかの形でキャリア教育に取り組んでいることが明らかになった。しかし、教育課程に位置付けて行っている聾学校は21校(26.9%)と少なく、さらにその中でも学校全体に位置付けている割合は少なかった。なお、この調査より、協力可であった41校を調査Iの対象校として抽出した。

2. 予備調査2

調査Iに用いる質問紙の質問内容及び表現の適切さを検討し、質問項目を決定することを目的とした。A県立B聾学校の4名の教員に意見を記入してもらい質問項目を決定し、加筆修正をして調査Iの質問紙とした。

IV 調査I

1. 目的と方法

聾学校におけるキャリア教育の取り組みの現状を明らかにすることを目的に、予備調査Iで抽出した41校の聾学校に郵送法で質問紙調査を実施した。回答は適任の教員に記入してもらった。調査期間は、平成20年7月上旬～7月下旬とした。

調査用紙は、「学校全体」と「各学部」に分けた。「学校全体」の調査項目は、①教育課程への位置付け、②校内組織、③実施しようとしたきっかけ、④目標、⑤聾学校において配慮している点、⑥実施学部、⑦校内研修会、⑧学部間連携、⑨成果、⑩課題、⑪キャリア教育についての意見とした。「各学部」の調査項目は、①教育課程への位置付け、②実施学年、③実施教科・領域、④実施内容、⑤特に力を入れている活動、⑥各学部におけるキャリア教育についての意見とした。結果の処理については、選択肢の質問については数値を集計し、記述式の質問については、類似した内容の回答を集めカテゴリー分けをして分析をした。

2. 結果

41 校中 30 校の聾学校から回答があり、回収率は 73.2%であった。

学校全体、各学部ともに①については、「教育課程には位置付けていないが、キャリア教育を行っている」という聾学校が 13 校と多かった。学校全体の②キャリア教育の校内組織については、30 校中 13 校(43.3%)の聾学校にあることが分かった。③実施しようとしたきっかけでは、適切な進路選択をするためなど「進路指導を充実させるため」という理由が 15 件と多かった(図 1)。^④目標では、自分で進路を決定するなどの、キャリア教育の諸能力領域の中の「意思決定能力」の育成に関する目標が 12 校から挙げられ最も多かった。^⑤聾学校において配慮している点では、体験を重視する、発達段階や障害特性に配慮するなど子どもへの配慮が多かった(表 1)。^⑧学部間連携をする上での容易な面は、「情報交換・意識の共有がし易い」という回答が 14 件と多かった(表 2)。困難な面では「各学部で一貫して取り組むことが難しい」という回答が 8 件と多かった(表 3)。また「時間の確保が難しい」という回答も 5 件挙げられた。^⑨成果では、進路に対する意識が深まった、離職率が低下したなどの子どもに対する成果が多く挙げられた。体験学習の効果が大きい、他の授業場面でも般化されているなどの成果も挙げられた。^⑩課題については、「受け入れ企業や事業所との連携」が 30 校中 19 校と最も多かった。次に、「専門的な知識の充実」が 16 校、「教員間の共通理解」が 14 校、「時間の確保」が 12 校と続いた(図 2)。

また、各学部の③実施教科・領域から、キャリア教育は総合的な学習の時間、特別活動、自立活動などでの実施率が高いことが分かった(図 3)。小学部では各教科での実施率も他学部比べて高く、主に「社会科」の時間に実施していた。^④実施内容から、中・高等部では職場体験、職場見学の中でキャリア教育を実施している割合が高いことが分かった(図 4)。特に高等部では回答校中の 9 割以上の聾学校でこれらの内容を実施していた。

表1 聾学校においてキャリア教育を行う上で配慮している点

カテゴリー	回答数(件)
①子どもへの配慮	20
体験を重視している	6
発達段階や障害の実態に対する配慮	6
障害認識や自己肯定感に対する配慮	5
コミュニケーションやマナーに対する配慮	3
②学校内への配慮	11
学部間連携に対する配慮	3
計画に関する配慮	4
教員に関する配慮	4
③学校外への配慮	6
保護者への配慮	5
企業への配慮	1

表2 キャリア教育を行う上での学部間連携「容易な面」

カテゴリー	回答数(件)
①情報交換・意識の共有がし易い	14
資料の引継ぎができるため	3
委員会が開かれるため	2
職員数が比較的少なく、職員室が同じであるため	1
児童生徒数が少なく、職員が子どもの様子を把握し易いため	1
各学部担当者がいるため	1
各行事を通して意識の共有ができるため	1
その他	5
②全体的な取り組みができる	3
③その他	2

表3 キャリア教育を行う上での学部間連携「困難な面」

カテゴリー	回答数(件)
①各学部で一貫して取り組むことが難しい	8
発達段階が学部で異なるため	5
学部ごとの教育課程や行事が異なるため	2
重複障害の児童・生徒のことも考える必要があるため	1
②時間の確保が難しい	5
③キャリア教育に関する知識や認識が不足している	2
④その他	1

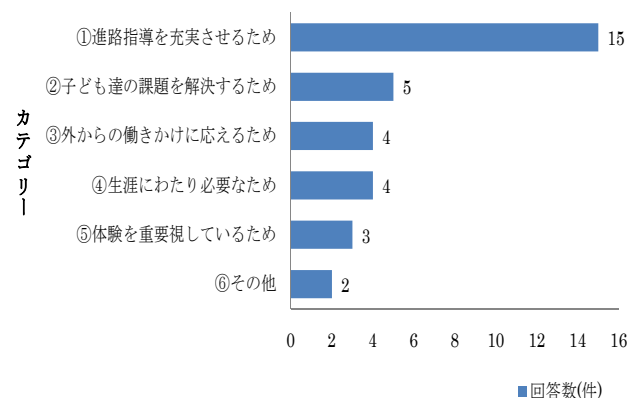


図1 キャリア教育を実施しようとしたきっかけ

V 調査II

1. 目的と方法

キャリア教育について、先進的な取り組みを実施している聾学校から詳しい情報を収集することを目的とし、インタビュー調査を実施した。対象は、調査Iで回答のあった聾学校の中で、学校全体でキャリア教育に取り組んでいることが分かったC聾学校及びD聾学校。平成20年10月下旬に実施した。C聾学校には「キャリア教育委員会」を中心に質問をした。D聾学校には、各聾学校から課題として挙げられていることへの対策などについて質問をした。

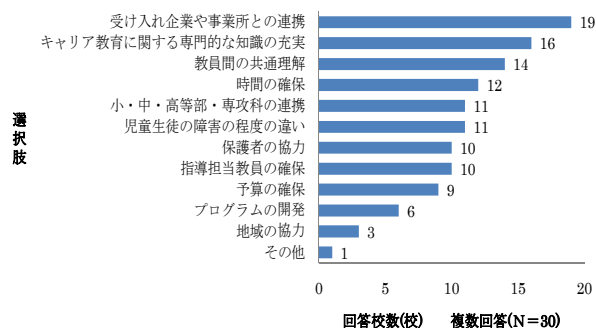


図2 キャリア教育を行う上での課題

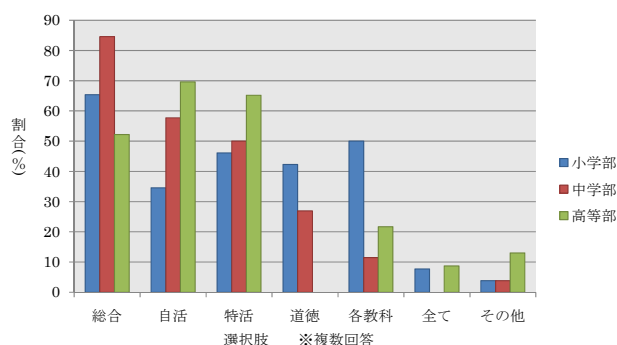


図3 各学部における実施教科・領域

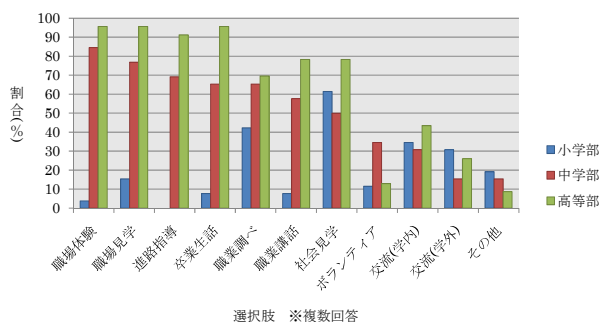


図4 キャリア教育の実施内容

2. 結果

C聾学校では、「キャリア教育委員会」が月に一度開かれ、小・中・高等部の教員が委員になって各学部で連携をとっていることが分かった。進路指導部も存在し、連携を取りながら進めていた。一方、D聾学校では進路指導部を中心としてキャリア教育に取り組んでいることが分かった。進路指導便りを出し、保護者や他の教員の理解を得ていた。キャリア教育のプログラムについては東京都のモデルと各学部の進路指導便りを参考にしているということであった。

VI 考察

現段階でキャリア教育を実施している聾学校からは、児童生徒の抱える問題を解決することができたという成果が挙げられた。また、体験活動を実施でき、系統的・継続的な教育ができる点は調査IIからも示唆された。以上のことなどから、聾学校におけるキャリア教育は児童生徒が社会に出て生きていくためには有効であると考えられた。

キャリア教育の課題では、体験学習の受け入れ先との連携が最も多かった。特に職場見学、職場体験などにおける体験先の開拓が課題として挙げられた。この課題に対しては、学校だけでなく、職業安定所などの外部の機関や保護者に協力を得るという対策が考えられた。時間の確保も課題として挙げられた。この課題については、教育課程へ位置付けることが対策として考えられた。

文献

- 聴覚・言語障害教育研究部聾教育研究室(2001)一般報告書聴覚障害児の障害認識と社会参加に関する研究:「自立活動」の検討を中心に(平成10年度~12年度). 国立特殊教育総合研究所.
- 文部科学省(2004)キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書:児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために.
- 野澤克哉(1991)聴覚障害者の労働状況の変遷と展望「新しい聴覚障害者像を求めて」. 全日本ろうあ連盟, 116-117.
- 高橋宏太・四日市章(2001)聾学校生徒の職業意識と進路指導. 聴覚言語障害, 30(1), 1-10.